連歌資料　百韻二種　連歌切五点

Renga: two hyakuins, five fragments

岩下紀之
IWASHITA Noriyuki

ここに家蔵の連歌資料を紹介したい。

一　享徳四年三月八日　何人百韻

連歌懐紙表裏をそれぞれ切断した八枚を綴じた巻子本である。表には藍色の雲形模様、裏は非常に薄い色で雲形模様がある。少し虫損が生じたあと裏打がほどこされ、さらにその後、わずかばかり虫損が見える。

たて16・7センチ、よこは一の表のみ42・8センチ、その他はすべて51センチ前後。一表が他に比べて7センチほど短いのは、年号を記した端作りと、賦何人連歌とある一行の間の部分が切り取られているためである。その部分に法楽や千句であるむねの記載があったかどうかは不明となった。一裏十一句目「人目もる田のも」のあと、二裏六句目「霞たるらむ」のあと、三裏二句目、「ほたるあつむる」のあと、名残表十一句目「やとを忘なよ」のあとに切断の痕跡があるが、この懐紙が三つ折の形で保存された期間が長かったため、磨滅して損傷が生じたのであろう。また一裏の最後、二表の最初、二裏の最後などにこよりで綴じた痕跡の穴が二つ見える。

この連歌で興味深いのは忍誓の活躍である。従来享徳二年八月の『小鴨千句』が忍誓の最終の連歌の事跡であったが、この百韻はその二年後の成立である。この時専順は四十五歳、行助は五十一歳と、すでに経験を積んだ連歌師であったが、忍誓は発句をよみ、最高の句数を出詠していて、彼らより上席を占めている。この年の正月の宗砌死去後は、忍誓が連歌界の首座を占めていたのであろう。

連衆のうち量阿・直清・慶俊・光長・覚阿・与阿は『連歌総目録』に名が見え、『文安月千句』に与阿、『宝徳四年千句』に与阿、『享徳千句』に量阿が出座している。また種久・光伝・覚阿の三名は新撰菟玖波集作者である。作者部類では「藤原光伝　堀江七郎」「藤原種久　細河家人池田」（大永本・青山本）と見えるが、彰考館本には光伝に「武衛内堀江七郎」、種久に「武衛内堀江中務丞」とあり、斯波、細川あたりの家人らしいが判然としない。

忍誓・専順・行助以外の連衆も以上のように当時のそれなりの作者と推定できるが、それにしても十八人が出座しているのはかなりの盛会であった。忍誓はこの年東国に下向し、閏四月廿四日餞別の歌会に出席しているので、この百韻も同じように送別の意がこめられているかもしれない。

享徳四年三月八日

賦何人連謌

花そよる都の」川に浪はなし　忍誓
柳木ふか□」さくらちる比　専順
風よはき春とや」月も曇るらむ　行助
かすむ行ゑの」みねの秋霧　久真
天津空はつ」鴈かねの又鳴て　満則
をしかのかよふ」野こそ遠けれ　善雅
村時雨めくれる」かたや暮ぬらん　種久
影見えぬ雲に」さゆる冬の日　量阿
（ウラ）松原のおくに」古江の水さひて　光伝
門にはつなく」あまの釣舟　常永
住人の罪さり」ぬへきなには寺　直清
法にもあはぬ」すゑの世中　慶俊
篠ふかきまきの」駒の毛みえわかて　光長
山へをつたふ」みちのひとすち　快成
梯のくちてあや」うき谷のかけ　重近
雲たえ〳〵の」夕たちのあと　覚阿
夜をゝくり秋まつ」月はほのかにて　与阿
とはれぬ床に」やとるいなつま　行
人目もる田のも」の庵の暮もうし　順
かれすや露の」袖をちきれる　忍
行末をたのむ」つとめのあかの水　真
むすひとくなり」このきやうのひも　満』
（二）おなし手にかすとる」玉のをゝくりて　忍
つもれる年に」命をそしる　伝
きえもせて春」待ほとの宿の雪　順
のこれるはいに」しろき埋火　常

たきものゝ匂ひそ」かたみ梅の花　行
野へのわかれも」たゝ君かため　順
いつる日もまつ」都路はのとかにて　直
ふねに風なき」しかの山かけ　真
旅ねにも昔の」夢のみえやせむ　量
かたらふ友を」おもふ秋の夜　長
さとはあれ月は」さひしくふけはてゝ　忍
露さむき野に」うつらなくなり　行
霜にふす尾花か」末やかれぬらむ　俊
しけきそもとの」思ひくさなる　伝
(二ウラ)さはらすはたれわけ」いらむ恋の山　順
涙はさらに」石はしる滝　与
まちわたる中には」うきせなくもかな　忍
くれてそ浪の」さはく河舟　真
水上の嵐に」雨のさそはれて　満
おつる木の葉や」露みたるらむ　量
深山路の月は」雲まに見えかくれ　行
さためなき世を」いてし身の秋　忍
古郷やとふへき」人もわするらむ　順
やゝふかくなる」庭の春草　直
雪とくるあとは」みとりのたまり水　伝
行かたわかす」野はかすみけり　種

鷹のをふ鳥は」山〳〵引こして　長
かりはの弓の」かへるさの道　俊『
(三)袖さむし吹をくる」風やつよるらむ　忍
烋の日かすに」あるゝ草の戸　真
うら枯のあし屋の」さとの興つなみ　伝
たつやしほせの」なたの夕霧　量
心して夜舟は」月をまてしはし　順
まよひきにける」山のした道　与
しらさりし人にも」あふは契にて　直
かゝるなさけを」たれかわすれん　真
初さくらにほふ」たもとの春の風　長
かすみのおほふ」野にそ友ひく　忍
鶯のなくねに」おくる草まくら　行
あくれはこゆる」関の山みち　文阿
浪あるゝ須まの」うら船のり捨て　善
おもはぬかたに」うつる世はうし　俊
(三ウラ)おしむへき光の」かけよ身にとまれ　常
ほたるあつむる」まとの暮かた　忍
秋風にかやふく」軒やみたるらむ　満
しのふの末の」露そ散行　与
わけわふる岡の」下道霧とちて　行
雲のと山の」月のあけほの　伝

なく鴈も春の」わかれやうかるらん　種
旅たつあとの」花もわすれし　順
古郷のすみれ」つむ野と成をみて　忍
なみたいろこき」老人のそて　行
後の世をなけき」きにける墨衣　直
せめて詞も」うかへ一筆　常
うつし絵にのこる」面影主やたれ　順
うきにこゝろそ」思ひあはせし　量』

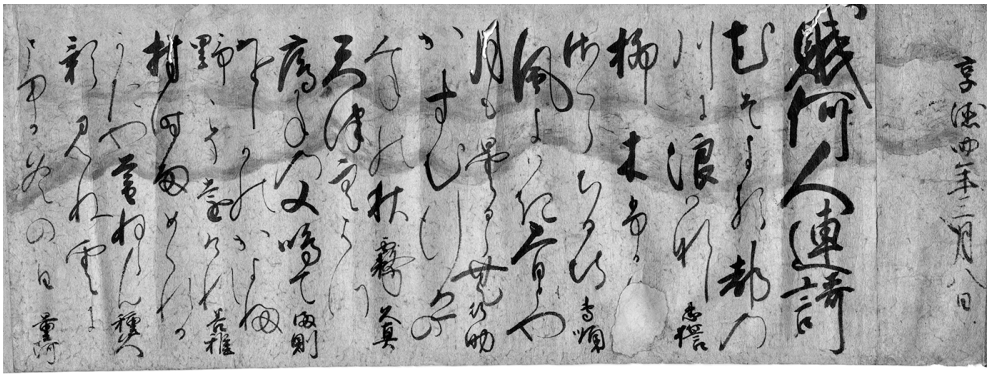
（名）いつよりの月とも」しらすめは覚て　伝
あふきわするゝ」ねやの秋かせ　順
今朝見れは散ける」きしの柳かけ　忍
うつろふ水も」やまふきの色　与
さひしかるかはつ」の声に春暮て　行
かすみもまたす」そゝくむら雨　俊
岩かねのかさなる」山路しのく日に　量
とふ事かたし」みねにある寺　忍
冬の夜の月を」たに見ぬ松か本　行
夏のしけみに」卯の花そ[さ]く　順
郭公わかまつ」やとを忘なよ　真
ほとは雲井の」よそにすむ里　直
ひとへなる中の」衣もいとひしに　忍
そてぬれとをる」露そをきそふ　善

（名ウラ）秋ふくるは山おく」山とをくきて　真
なひくつくはの」田をやかるらむ　長
影ひろき月の」夜ころは霧もなし　直
ひかたのまさこ」霜そみち□□　行
なく千鳥かよふ」はまへにあとつけて　快
いもにやみせむ」みつくきの□□　忍
かきやれるふりわけ」髪のそのすかた　順
いく代といはふ」末も長かれ　近

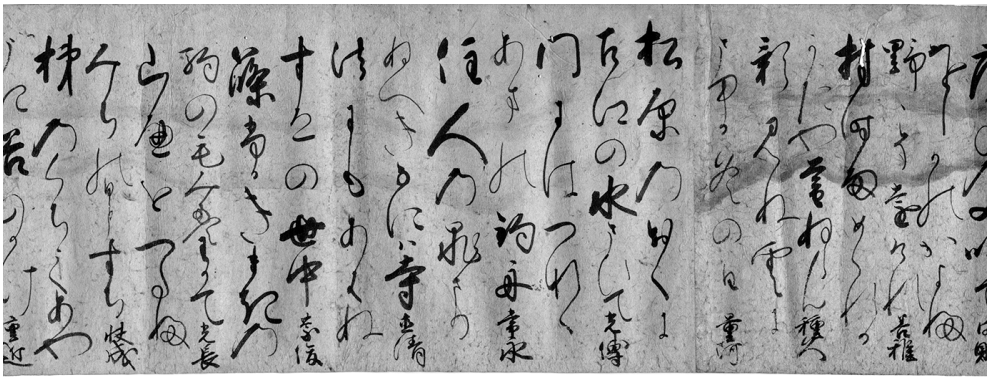
忍誓　十四　直清　七
専順　十二　慶俊　五
行助　十一　光長　五
久真　八　快成　二
満則　四　重近　二
善雅　三　与阿　五
種久　三　文阿　一
量阿　六　覚阿　一
光伝　七
常永　四

次に画像を掲げておく。

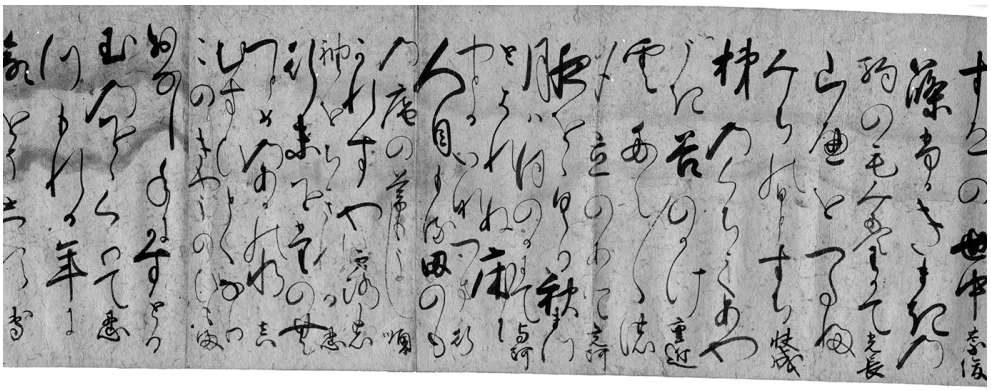
①



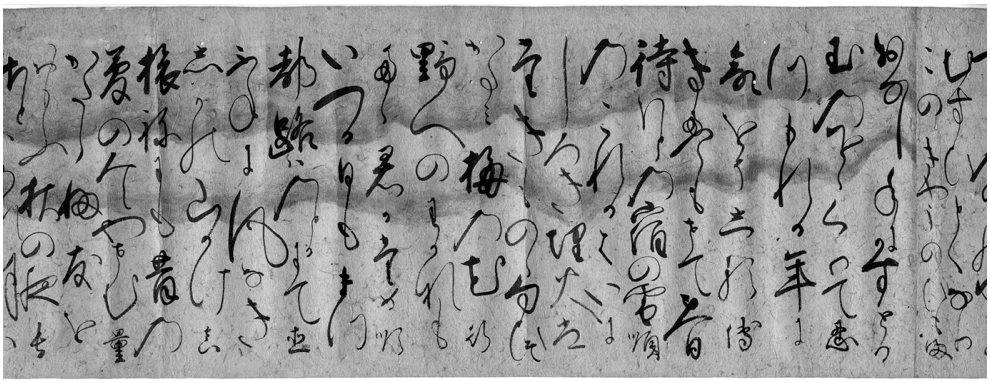
②



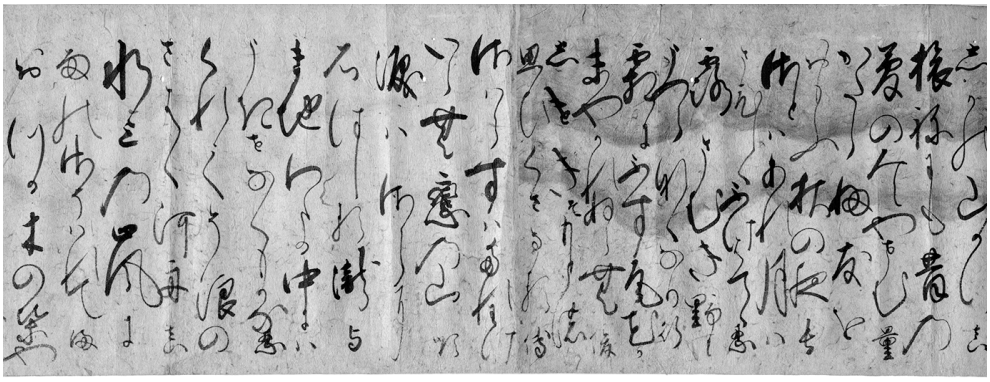
③



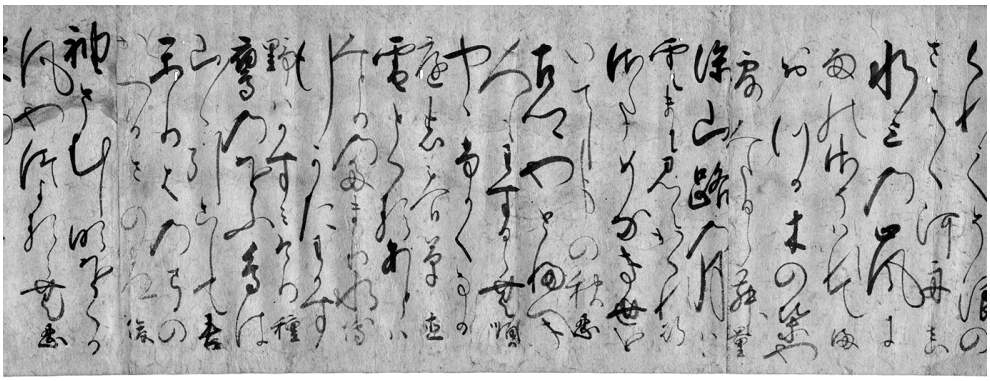
④



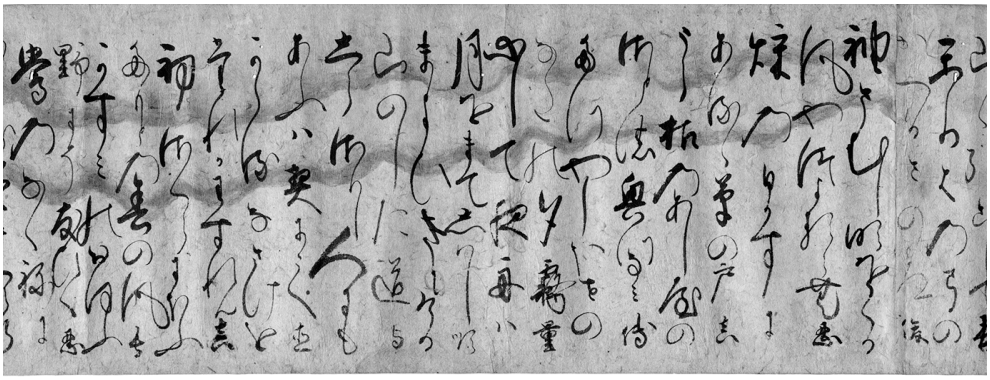
⑤



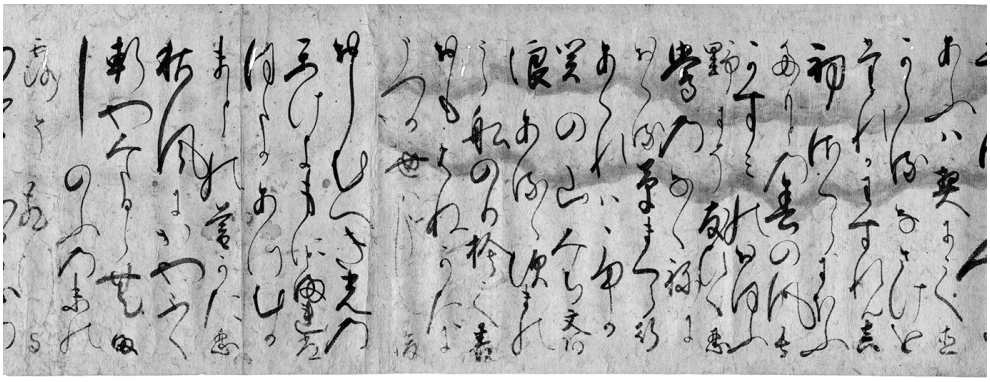
⑥



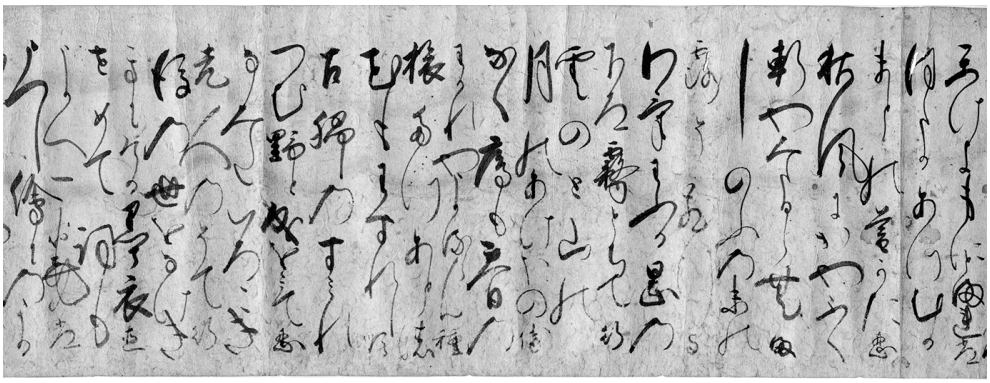
⑦



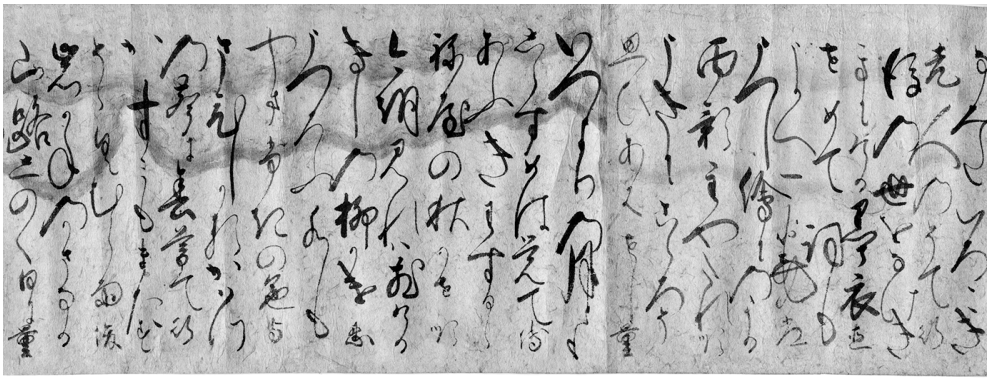
⑧



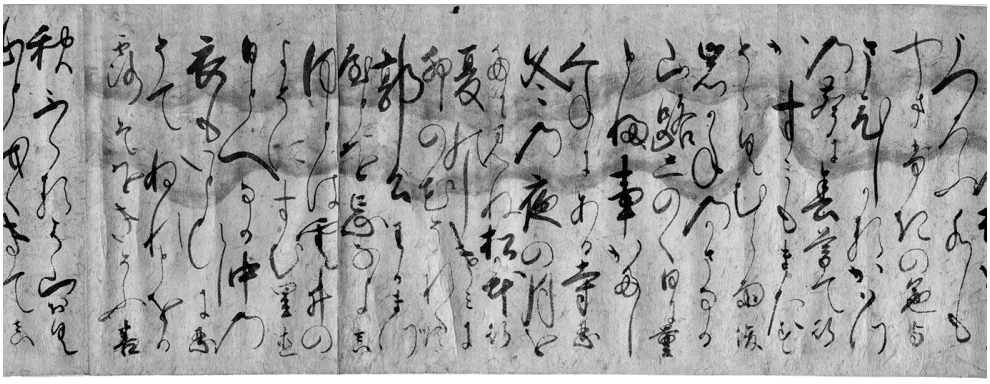
⑨



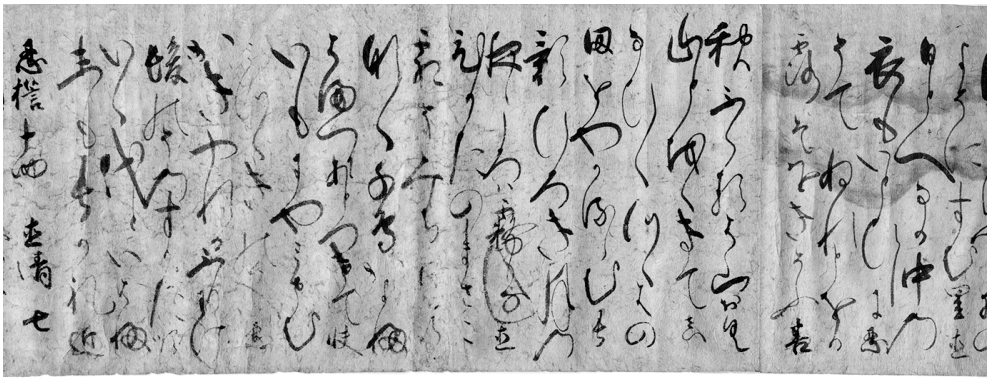
⑩

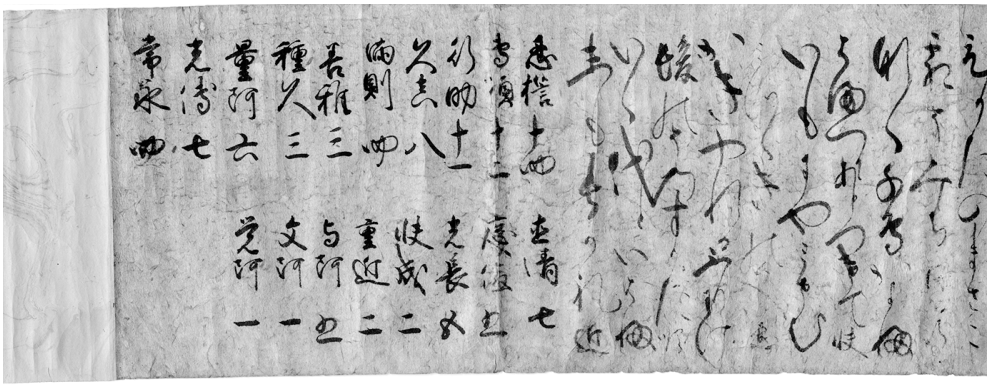


⑪



⑫





二　永正四年卯月廿七日　片何百韻

四枚懐紙を型通りにこよりで綴じているが、一巡と句上げが一致せず、不完全であることは明らかである。考証にあたっては煩を避けるため、便宜的に初折から二、三、名残の折と称して句を示すことにする。

たて17・5センチ、よこ51・8センチ、無地の用紙で四枚とも同質の紙、一人の手による。

ところでこの張行年月日の百韻は『連歌総目録』に記載があり、天満宮文庫蔵の二本が示されている。その長松本の句上げは本懐紙と異なっているので照合の必要を感じ、閲覧を願ったところ、ただちに許可をいただいた。深く感謝申し上げる。ついてはここに調査の報告をしておきたい。

まず長松本は年号のすぐ左に次のように考証している。朱筆で次のように記す。

此百韻南都西若狭守師寿之家蔵也、其時代之懐紙四枚、執筆之手跡も殊勝なるもの也、一見之処懐紙連続シタル物ニアラサル欤、千句之懐紙入乱テ四枚残タルナルヘシ、勿論指合多、只其時代之連歌故先写置待ルナリ

南曲本も同じように年月日のあと朱筆で次のように記す。

長松案

此百韻一巻、南都高畑西若狭守家蔵之由ニ而内藤重郷与来一見之所、執筆モ殊勝ナルモノ也、但懐帋ハ連続シタル物トモ不見、遺恨不少、猶可加後勘者欤

これを見るに、南曲本は長松本を写しているのが明らかなので、以後長松本に即して考えてみたい。

この懐紙と長松本の本文は一致しており、同一の作品である。四枚の懐紙の不連続について長松本は朱筆で、三表の冒頭に

きり〳〵す前にあり生類もなし

と記し、二表一句目にきりぎりすがあり、三表一句目にもきりぎりすが出ていることを示す。一座一句物が百韻に二度出ることはあり得ないので、二の折と三の折は一作品に共存しない。名残表にも同じように「月打越ニあり」と注記し、この四枚の懐紙が「連続シタル物ニアラサル」ことを証明している。連衆の顔ぶれ、懐紙の同一なること、筆者が一人であることから、「千句之懐紙入乱レテ残リタル」ものであるとの考証も妥当である。

とすれば、このような不完全な懐紙が複数あるとは考えにくく、長松が見た南都西若狭守師寿家蔵の懐紙とこの懐紙の関係を想像したく

なる。本懐紙と長松の写しにはいくつかの異同がある。その中で二表十四句目、三裏十三句目、名残表十四句目に注目する。ここに懐紙の文字を示す。

二表十四句　三裏十三句　名残表十四句

長松はこれを「ふること」「待中も」「つゐは」と判読しているが、懐紙による限り、「ふるさと」「待中に」「つゐに」と読むしかあるまい。つまり長松は原文の細い部分が見えなかったのであり、これは書写した室内の明るさ、又は長松の視力に原因を求めないわけにいかない。またこの懐紙の文字がそのように誤りやすい形体であること自体、とりもなおさず、長松の見た懐紙そのものであることをあかしている。

長松は以上のようにこの四枚の懐紙が不完全であると看破しながら、もとの懐紙の句上げに従ってこの形での各人の句数を数え、結果を記している。そのため周桂には「此作不見」などと記している。句を出さなかった人物が句上げに列挙されるなど有り得ないわけで、もとの句上げに従って集計してみたということであった。天満宮文庫の大きな連歌書写本群を構築し、連歌書多数を目にしてきた長松にして、室町時代の連歌懐紙は珍重されるべきものだったのであろう。

永正四年四月に宗祇直門の連歌師によって千句が興行されたことは実隆の記録に見えず、内輪の営みであったと思われる。当時肖柏と宗長はそれぞれ池田、駿河にあったとおぼしく、泰諶、宗碩、玄清、宗坡、宗仲らの力は拮抗していたようだ。宗碩は永正後期ますます活躍するが、他の人々はしだいに事跡が見えなくなって行く。そのような時期の千句の断片であった。

永正四年卯月廿七日

第四

賦片何連歌

卯花は花なき」ころの山路哉　宗仲

木のしたつゝし」夏ふかき色　専芸
春はやゝ岩行」水にうつろひて　太清
雪けを庭の」しつくにそみる　光信
さえすつるかすみの」軒のあさことに　宗碩
はねほす鳥の」日かけまつ声　家令
谷のとやそはの」かけみちしつかにて　宗坡
入みねとをし」あふ人もいさ　泰諶
（一ウラ）くれて行嵐の」雲のむら〳〵に　能椿
ほのみし月や」ひかりそふらむ　寿慶
もろくなる木葉に」秋のやとはあれて　能祐
しのふにみたす」露のはかなさ　成充
心にもあらぬ」袖ゆへ名やたゝむ　玄清
つらき人香は」よしきえねたゝ　珠厳
中〳〵の形見は」しるもかひなくて　家信
わかれもはては」何かのこらむ　宗仲
いとへ世のほとこそ」さらにうきいのち　泰諶
おしからぬ身よ」野にも山にも　光信
しほれきぬぬきも」すてはや旅衣　能椿
都にちかき」かへさとそなる　宗坡
草木さへみしと」おもふをたよりにて　宗仲
さすかなくさむ」そのゝ霜かれ　玄清『
（二）きり〳〵すうれふる」声のたえ〳〵に　光信

やゝふけはてゝ」月たかきころ　太清
こぬ人にのこれる」秋の夜はもうし　能椿
身にしめよとの」思ねの空　宗碩
おもかけは別ゆく」はたさたかにて　宗坡
きゝしは雲の」山ほとゝきす　専芸
をそさくらあはれ」花とやにほふらむ　泰諶
しつかかきねも」春はくれけり　宗仲
かきりあれは荒たる」小田もかへす日に　珠厳
水せくほとの」袖のくるしさ　成充
おもひあまる思ひを」むねにをしこめて　太清
いはすはうらみ」誰にしられむ　光信
うきにのみたへて」すむとも夢の世に　家令
なをふるさとを」したふおろかさ　玄清
（二ウラ）なれきつる月よ」いかなる秋ならん　宗仲
おきに風ふく」さ夜の手枕　家令
鴈の声めさまし」あへすきゝそめて　家信
おとすなみたは」われからの袖　能椿
かこたしよかゝれ」とてこそたのむらん　宗碩
いつかうからす」つらからぬくれ　珠厳
なこりにもならは」なりねと思ふ身に　泰諶
誰におしまむ」柴の戸の春　能椿
みはてすは折たに」かへれ花のかけ　宗坡

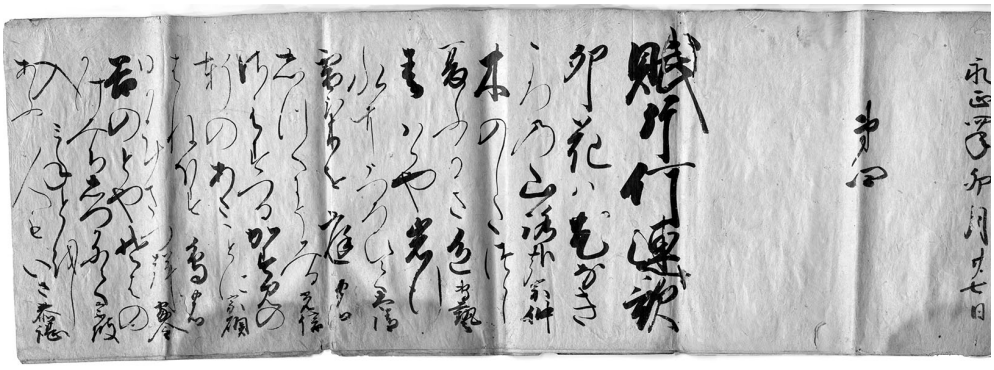
みちはかすみの」山のかたはら　宗仲
おき行はあさなく」きゝすこゑたてゝ　玄清
駒いそく野そ」そことしもなき　泰諶
わたりする川かせ」さむみすむ月に　宗碩
みきはのこほり」なみやかさねし　珠厳『
（三）きり〳〵すいのちの」きわを打わひて　家令
いたくなくにそ」われもなかるゝ　玄清
うき夕ひとり」独の上なれや　泰諶
けふりあまたの」雪の山さと　宗仲
松たてる軒」はつゝきに日のさして　玄清
またこぬ空も」たゝ秋の風　宗碩
さひしさよ分ては」何をそれならん　珠厳
こゝろのなれる」おもひとそしる　宗坡
よそに人うつろはぬ」色を猶みえて　寿慶
うたかゐぬれは」ちかふことの葉　玄清
あらはれぬ神とて」なとかはちさらん　家令
しめの中なる」花な手折そ　珠厳
大かたにすみこそ」なさね家さくら　宗坡
さし入みちも」春のふるあと　宗仲
（三ウ）かすみゆく浪に」うかへる難波舟　能椿
月はあり明」なかめすてめや　家信
とはしとは思ふも」秋やたゝにねん　宗碩
人のこゝろも」夜もなかき比　光信
きえはてぬ世ゝの」面かけ立そひて　太清
おほくのむかし」かそへてそうき　泰諶
袖ぬれつ老は」たかひの物かたり　玄清
はかなの友や」なくさめもなし　宗仲
暮ふかき草の」戸ほその松の風　能椿
しつまりあへす」又雨のをと　宗坡
なる神のめくる」雲ゐ路遠からて　泰諶
こえてそやまの」たかきをもしる　宗碩
侍中にやゝ深」わたる夜はの月　家令
そてもやさらに」萩のうへの露　寿慶『
（名オ）月に風吹夜や」いとゝすみぬらん　能祐
しつもいねしと」ころもうつ声　光信
人しれすくたくる」袖の露もうし　珠厳
千ゝのおもひは」しのひやはえん　専芸
わするゝをこゝろ」ひとつにうらみ来て　能椿
たれにおほせん」なみたなるへき　泰諶
科はたゝこなたに」つもる文そかし　光信
いらぬまなひに」うつす年月　宗碩
いはけなき身を」いつまてとをくるらん　泰諶
親のいさめも」かきりこそあれ　玄清
あらくしもたへし」命とうつ杖に　光信

又かりたつる」鳥のおち草　能椿
いく度か人に」思ひを付つらん　太清
あたなる名にや」つゐにはてまし　宗仲
(名ウラ)こゝろなくみえて」手折し山桜　家令
かへるみやこも」春くるゝ空　家信
玉ほこの道に」かすみをしのき来て　玄清
とへはさやけし」久かたの月　泰諶
面影やさらに」むかしの秋ならん　寿慶
夕へも露も」あらぬあさちふ　宗碩
身にそしむいかに」ふけはか風の音　専芸
おなし山とも」みえぬ高砂　宗坡

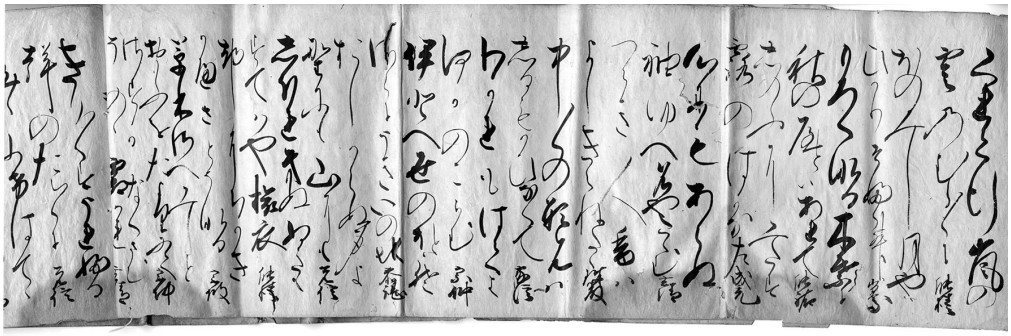
専芸　六　泰諶　十
成充　一　玄清　九
周桂　一　家令　八
宗坡　八　珠厳　八
光信　八　太清　五
能椿　七　能祐　二
宗碩　十　寿慶　四
宗仲　八　家信　四

以下に画像を添えるが、折り目が固く、綴じ目で句が見えないなど、遺憾なものになってしまった。

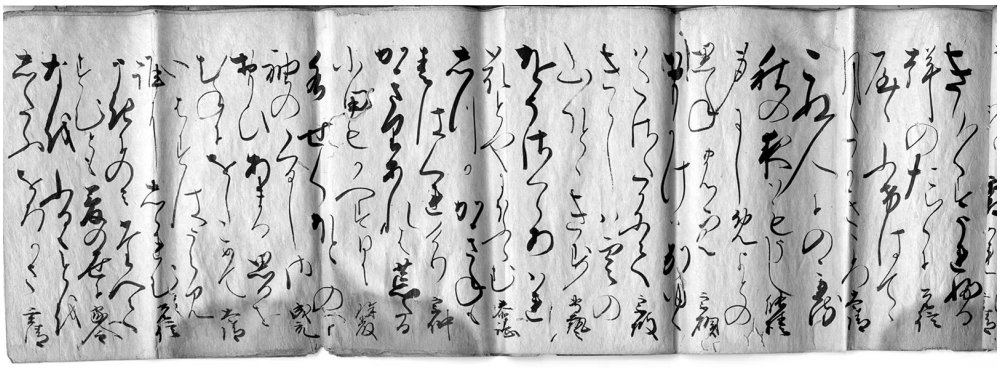
初表



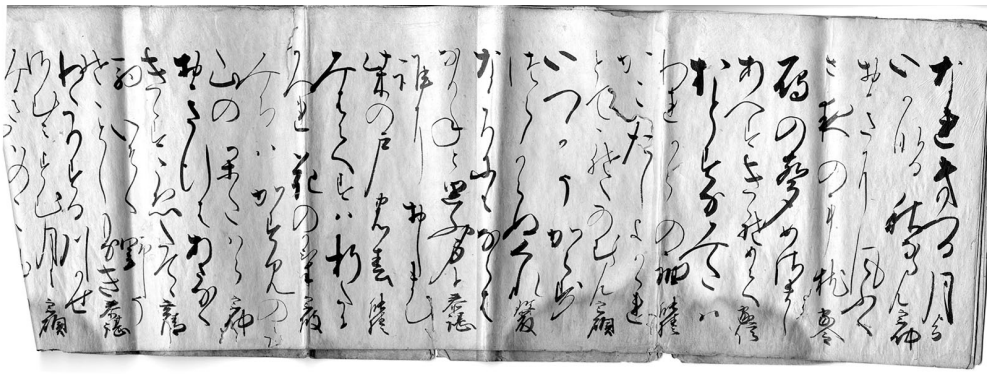
初裏



二表



二裏

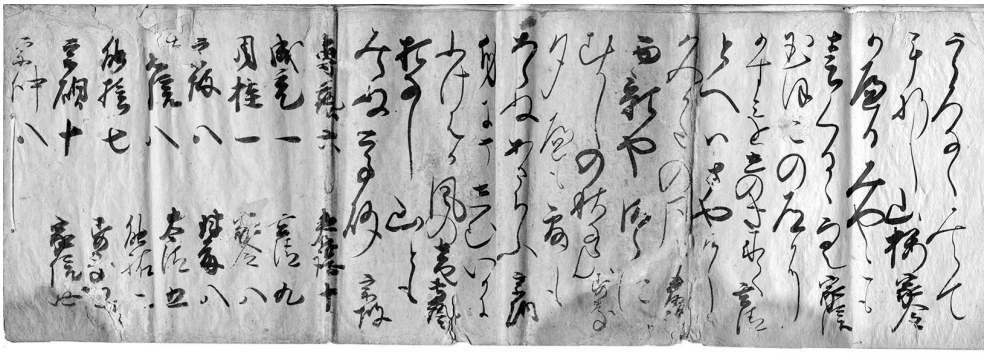


三表

三裏

名表

名裏



三　連歌切五点

家蔵の五点を紹介するが、片々たる断片は所蔵者の事情による散佚をまぬがれがたく、一つ一つの価値は僅かであるにしても、多数の切を博覧する研究者に今現在の状態を画像で示し提供しておきたい。

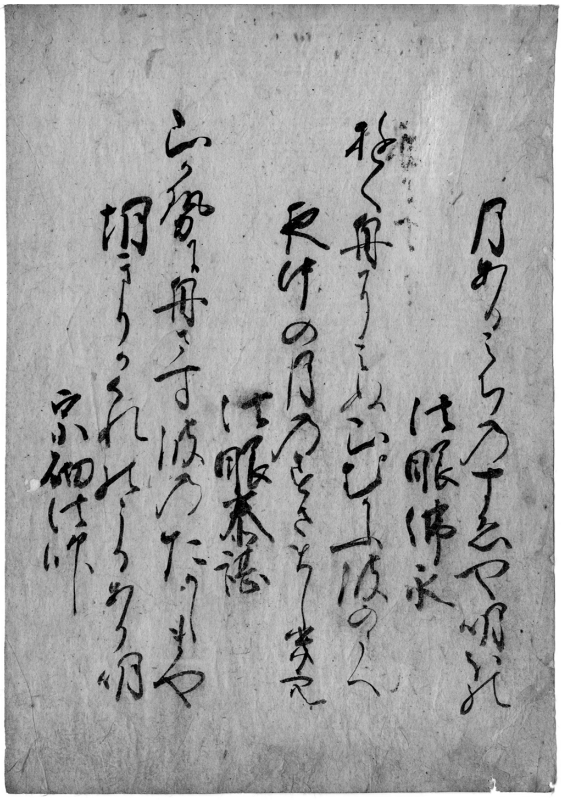
①たて22・8センチ、よこ15・8センチ。「連歌師宗牧　月あるみちの」との極書がある。朝倉茂入らしき印章が捺してあるが、印影きわめて薄く判読困難である。

『新撰菟玖波集』巻十二の二三八〇から二三八四までの句と付句作者の宗砌法師まで見える。古写本にめぐまれている同書の切で、特に注目される理由もないが、ツレが多く発見されれば何らかの新見がもたらされるかもしれない。二行目の作者「法眼紹永」とあるべきだが、どうも「佛永」に見える。

解読

月あるみちのすゑや明ほの
　　法眼仏永
ゆく舟にみぬ山むかふ波のうへ
夜中の月のすさましき空
　　法眼泰諶
山かせに舟さす波のたかしまや
朝きりかくれのこるあり明
　　宗砌法師

図①

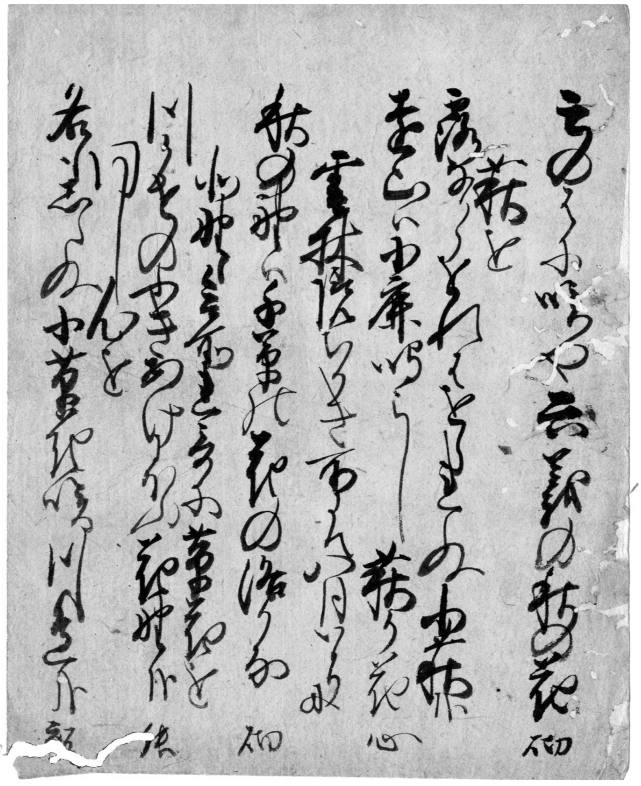


②たて17センチ、よこ13・6センチ。新日本古典文学大系本『竹林抄』１７１６から１７２１までである。古写本にめぐまれない本書では、断片であっても資料として注視すべきで、一層の調査が待たれる。小島孝之氏によって池田帯刀正能による切が整理されているが（「古筆切の中の連歌切二種について」（成城国文学論集第三十二輯））、こちらの切は作者表記の形式が異なっていて、別種のものと考えられる。大系本と比較すると、１７１４男鹿と小鹿、１７１９都哉と洛かな、１７２０詞書北野会所と北野ゝ会所など異文とはいえようが、読み方は同じでほゞ同文としてよかろう。裏面に「冷泉為益」と書いてあるが、この人は『公卿補任』元亀元年の条に前権中納言、八月廿三日薨と見える。この切との関連は不明。

解読

云の葉に咲や六義の秋の花　砌
　萩を
露なからをれはをられぬ小萩哉
遠山は小鹿鳴らし萩か花　心
　雲林院ちかき所にて八月はかりに
秋の野は千草の花の洛かな　砌
　北野ゝ会所連哥に草花を
川かせのふきあけにほふ花野哉　能
　同し心を
名もしらぬ小草花咲川辺哉　智

図②



③たて16・5センチ、よこ11・5センチ。雲形模様のある懐紙切である。『表佐千句』第一、三裏九から十一句目にあたる。古典文庫『千句連歌集』四と照合すると異同は見当たらない。「蜷川新右衛門親当　ほとゝきす」とする極書があり、朝倉茂入道順の印が捺されている。この千句は文明八年興行であるから、もとより親当とは時代が合わない。

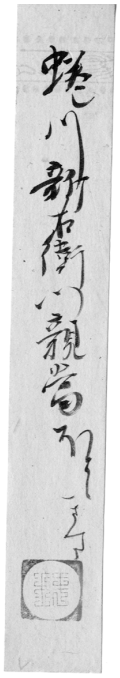
解読

ほとゝきす聞へき」比にはや成て　正

みしかき夜にも」ねさめかちなり　順

玉のをの猶たの」まれぬうき齢　甚

図③

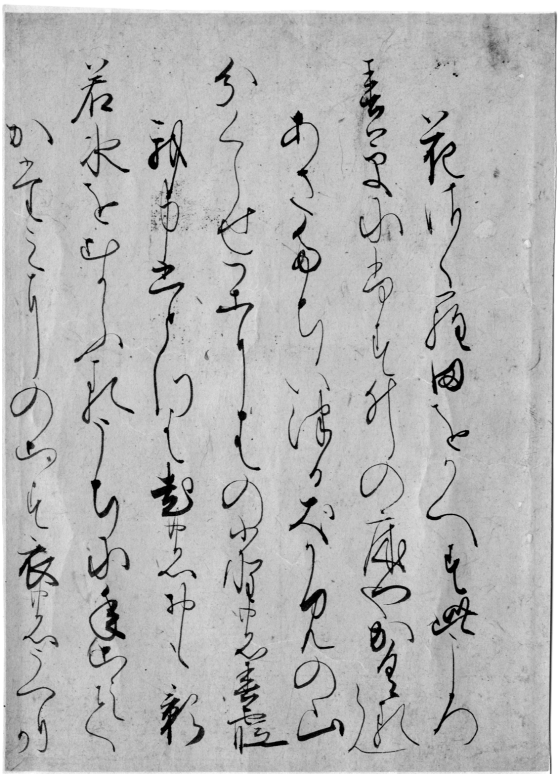


④たて16・1センチ、よこ11・4センチ。最初の一連が『七賢時代連歌句集』所収の『宗砌句』一三二一、一三二二、最後の一行が同じく一三七七と一致していて、未知の宗砌句集の切であろう。後土御門院とする古筆了雪の極書がある。『愛知淑徳大学論集』第三十七号に紹介した「影みれは」の連歌切も同じく後土御門院の極書があり、ツレである可能性が高い。未知の宗砌句集が存在したのである。『新撰菟玖波集』に百八句入集し、書陵部蔵賦物連歌に文明以来の懐紙を残す後土御門院が連歌好士であるのは疑いないが、この切の筆者かどうかはいまだ確証がない。

解読

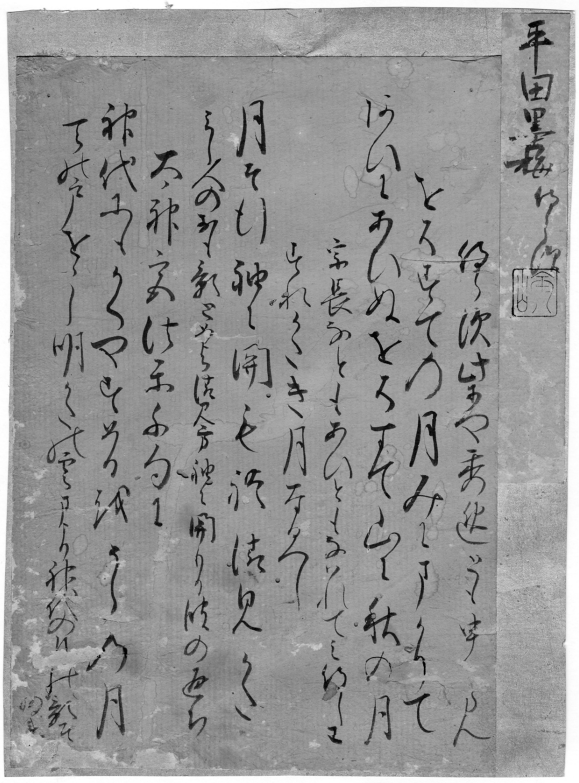
花さくら田をかへす此ころ
春草にふすゐの床やかくるらん
あさたちいつる犬かみの山
分くらせかにはの小野の春霞
我身ひとつは老のおも影
若水をむかふるうちに年こえて
かたみにのこす衣のうつりか

図④



⑤たて21・7センチ、よこ14・8センチ。『老葉』の宗長注本の切である。諸本を見ると、毛利本、宗訊本、愚句老葉の三本とも、この三句は連続しており重要な個所とおぼしい。平田墨梅とする極書があり、琴山の印を捺す。この伝承筆者については『顕伝明名録』に「墨梅　平田」とあるのみで不明。なお最後の部分、「神代の月の影そ残れる」とあったはずである。

解読

待らす此等や秀逸とも申□□らん
をはすての月みにまかりて
あひにあひぬをはすて山に秋の月
宗長なともあひともなはれてみ待しわ
すれかたき月なるへし
月そ行袖に関もれ清見かた
みし人のおも影とめよ清見方袖に関もる波の通ち
太神宮法楽千句に
神代にもかくやすめるをそらの月
天の戸をゝし明かたの雲まより神代の月の影そ
残れ□

図⑤